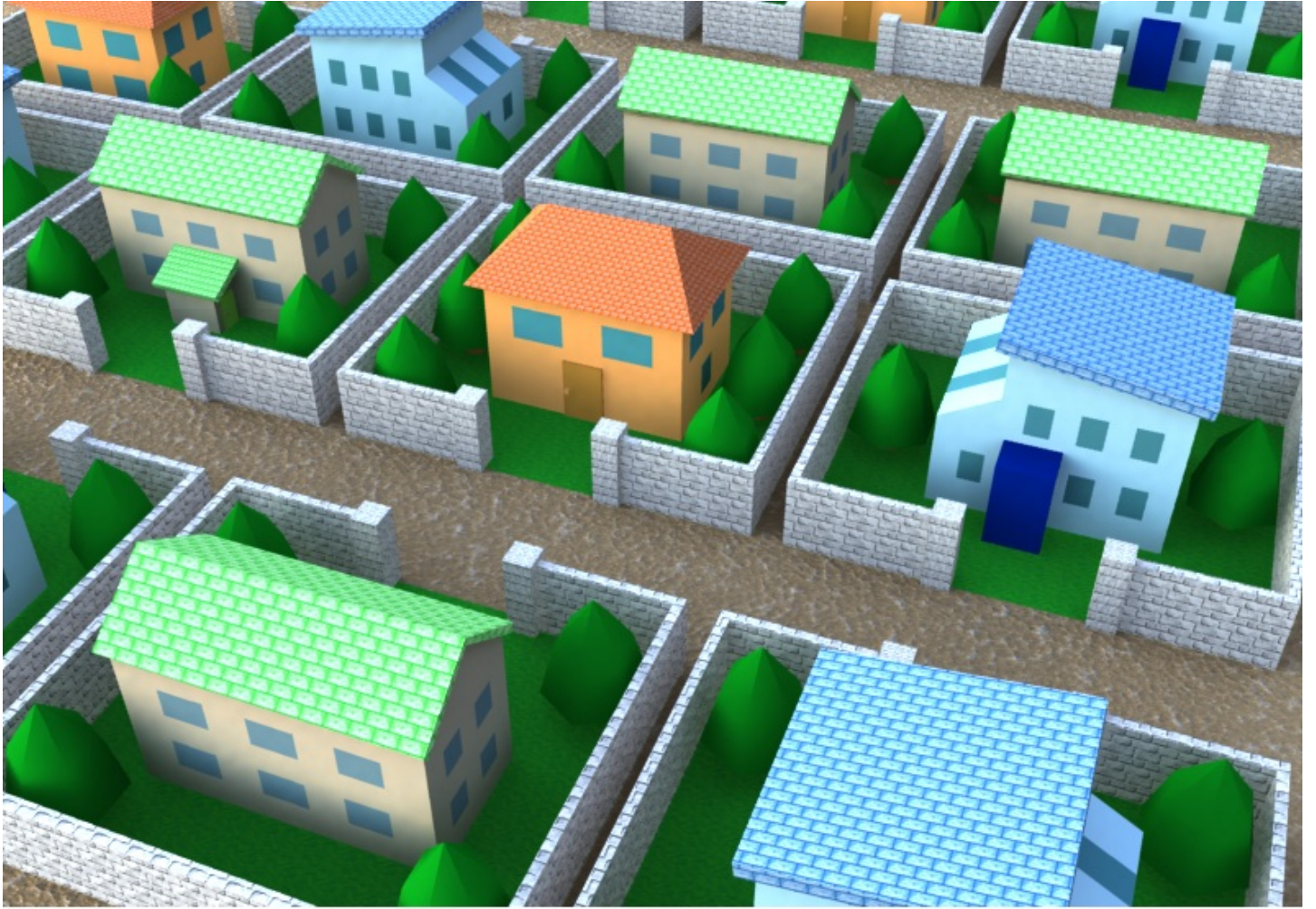


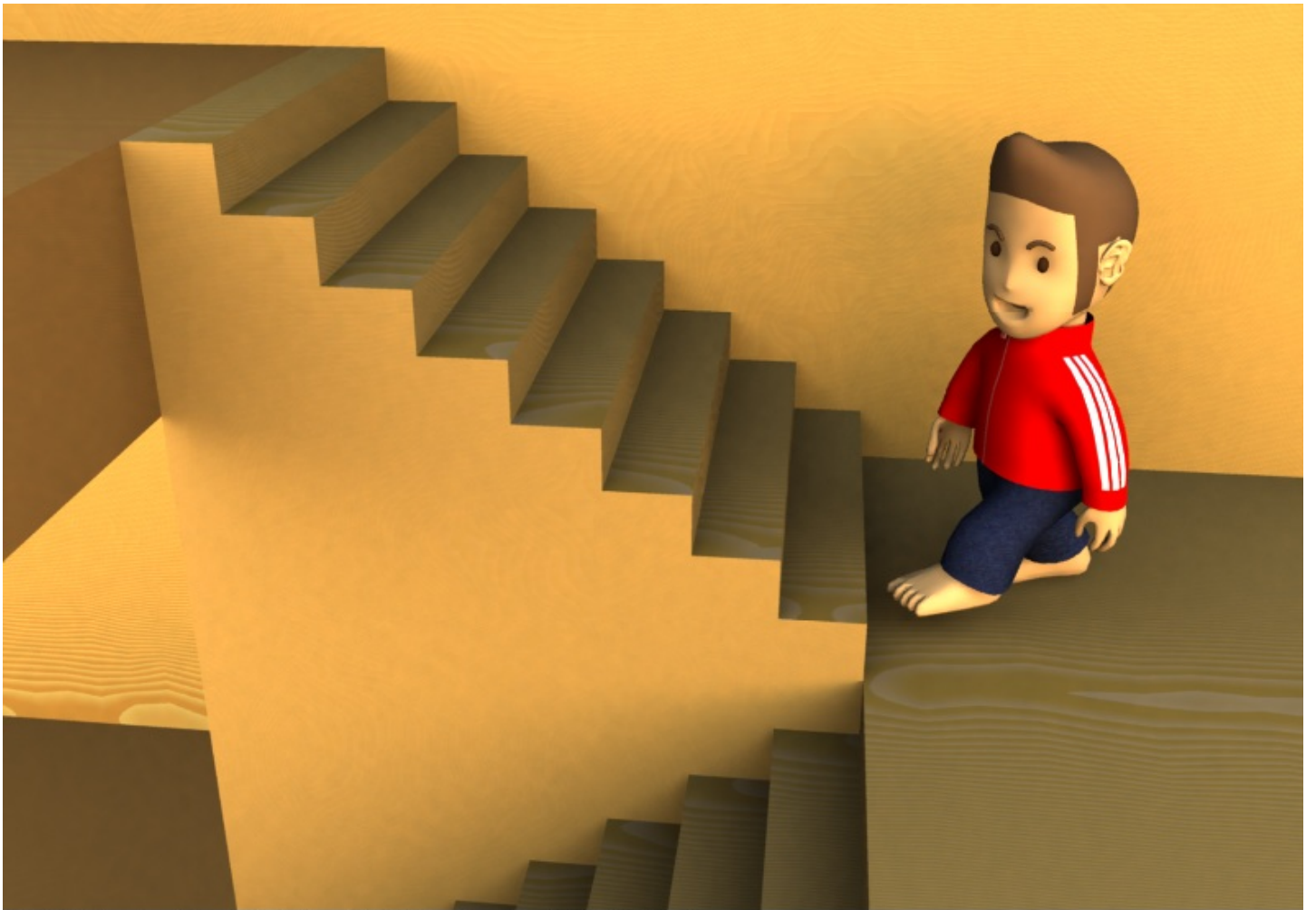
# ぼくとかみさま



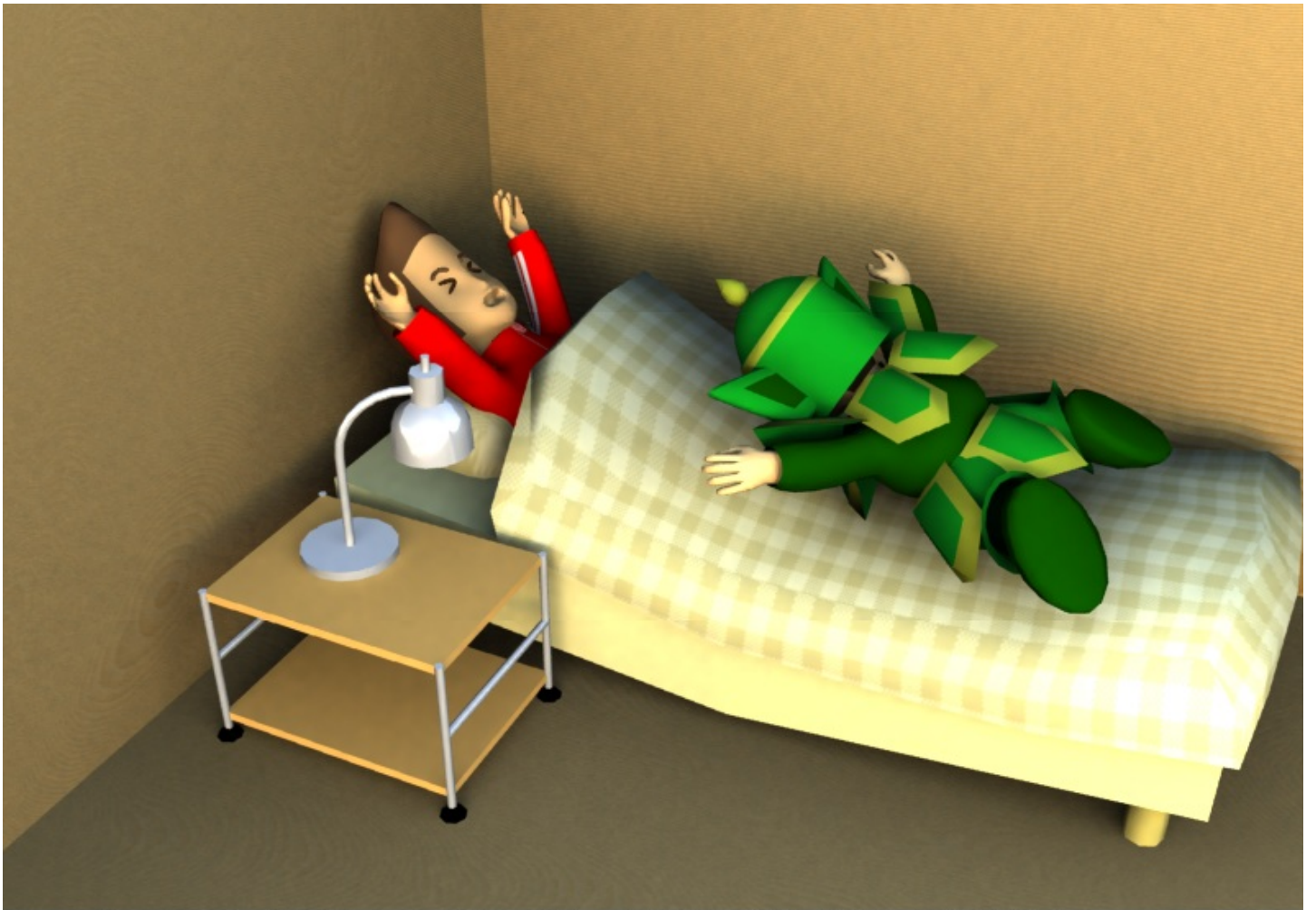


あなたは していますか？ どんないえにも ひとりの かみさまが いることを。

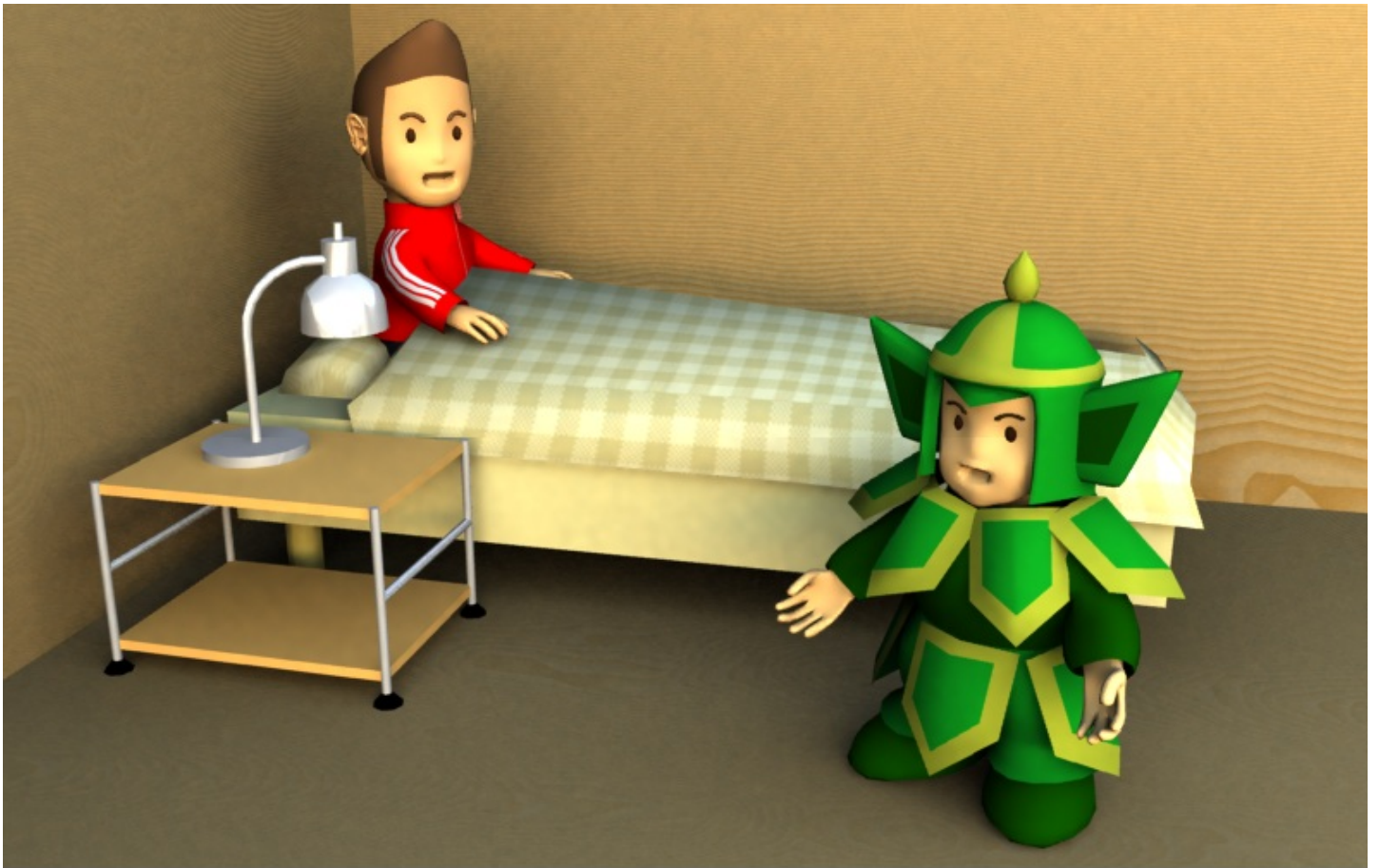




「おやすみ～」こうすけくんは じぶんのへやへと ねにいきました。



「グ〜、グ〜、グ〜」と ねていると、とつぜん ドスンッ! てんじょうから なにか おちてきました。



「なっ、なんだ？」

「ごっ、ごめんなさい、こうすけくん」

「きっ、きみは だれ？」

「わたしは このいえを まもる かみさまです」

「かみさま？」

こうすけくんには しんじられませんでした。





「じゃあ かみさまなら なにかできるの？」

「いっけんに ひとり かみさまが いて、みんな ちがう  
のうりよくを もっています」

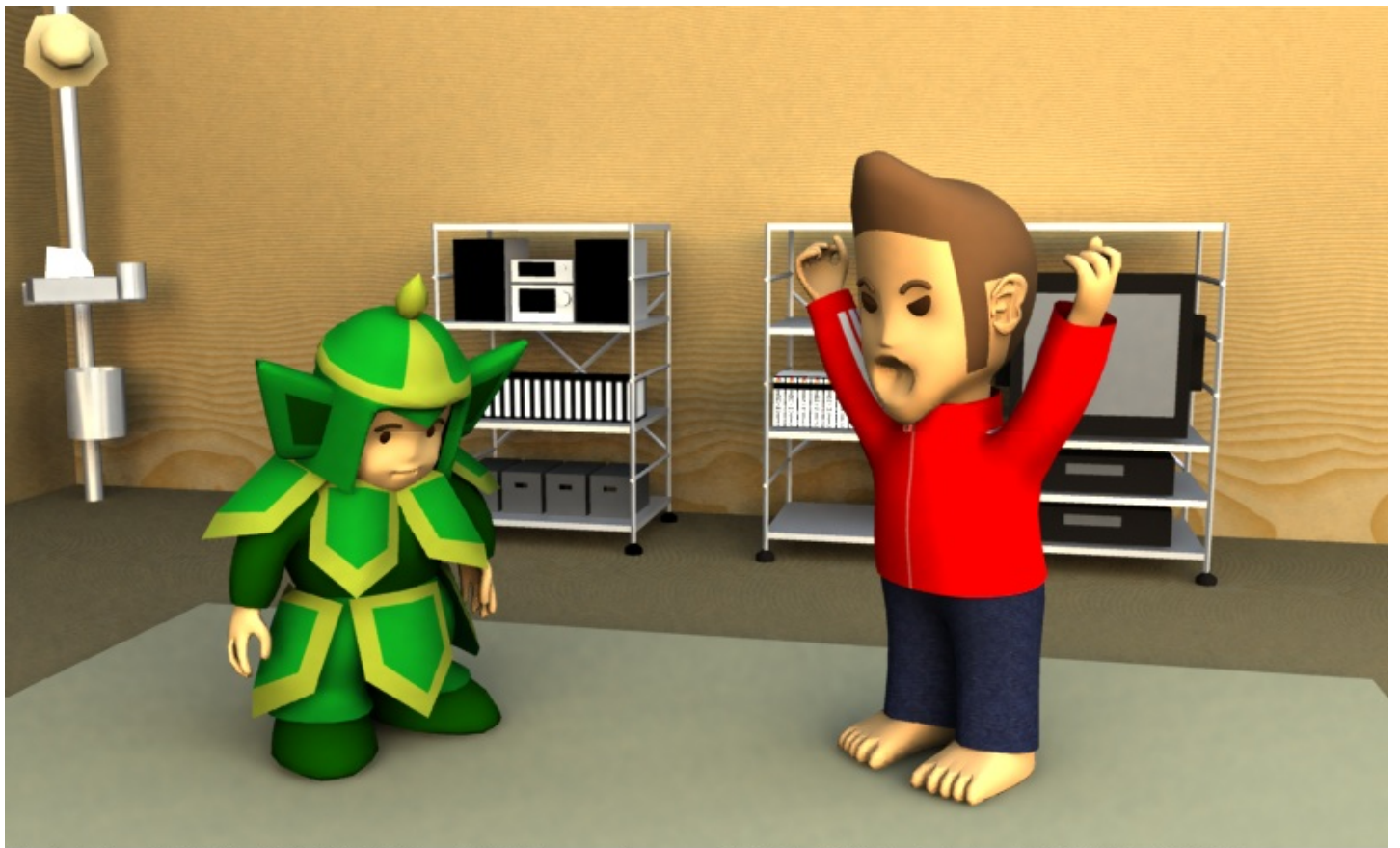
「へえー。きみには どんな のうりよくが あるの？」

こうすけくんは きょうみしんしんです。

「そっ、それは・・・」

きゆうに かみさまは こえを おとしてしまいました。

「なんなの？」



「わたしの なまえは『ドジがみ』と いいます・・・」  
かみさまは しかたなく こたえました。「いつも ドジ、  
ドジって ばかにされるのは、きみの せいだったの？」  
「わたしじしんも ドジって やねうらから

おちてしまいました」と ドジがみが わらうと、  
「わらいごとじゃない！」と こうすけくんに  
おこられてしまいました。「もう ねる！」  
こうすけくんは そのまま ねてしまいました。



よくあさめざめると、そこにはあのドジがみはいませんでした。

「ゆめだったのかな？」  
こうすけくんはいつもどおりがっこうへいきました。





ごごになって こうすけくんは がっこうから  
かえってきました。おかあさんが「こうすけくん、  
こんなかわいいかみさまが うちには いるのよ」  
と はなしかけてきました。「ドジがみじゃないか！」

「いつも わたしたちのことを みまもってくれているのよ」  
「お世話になります」ドジがみは ベこりと あたまを  
さげました。にくめないたいどに、こうすけくんも  
あきれて、つい えがおになりました。



ドジがみと いっしょにいと、こうすけくんは  
いろんなドジを ふんでばかりです。

たとえば、がいしゆつすると、「あれっ!？」  
さゆうのくつを はきまちがえました。



でんしゃに のっていると、「ゲー、ゲー、ゲー」

ふたりとも おりるえきを ねすごしました。





ふたりで いっしょに ふろに はいろうと とびこむと、「つめたーい！」まだ おゆが わいていませんでした。



そんな たのしい ひびが つづいていたのに、  
あるひ、もうひとりの かみさまが うちに  
やってきました。「ドジがみさん。ぜんのうのかみさまの  
いいつけで、あなたと こうたいに きました。

このいえを まもるかみは  
わたくし『きようがみ』に かわります」  
そう きようがみが いうと、  
ドジがみは しょんぼりしてしまいました。



「わたしのせいで いままで、みなさんに めいわくを  
かけてきました。みなさんが ドジばかりふまないように  
もっといいかみさまと こうたいします」そういつて  
なきながら、ドジがみが いえを でようとすると、

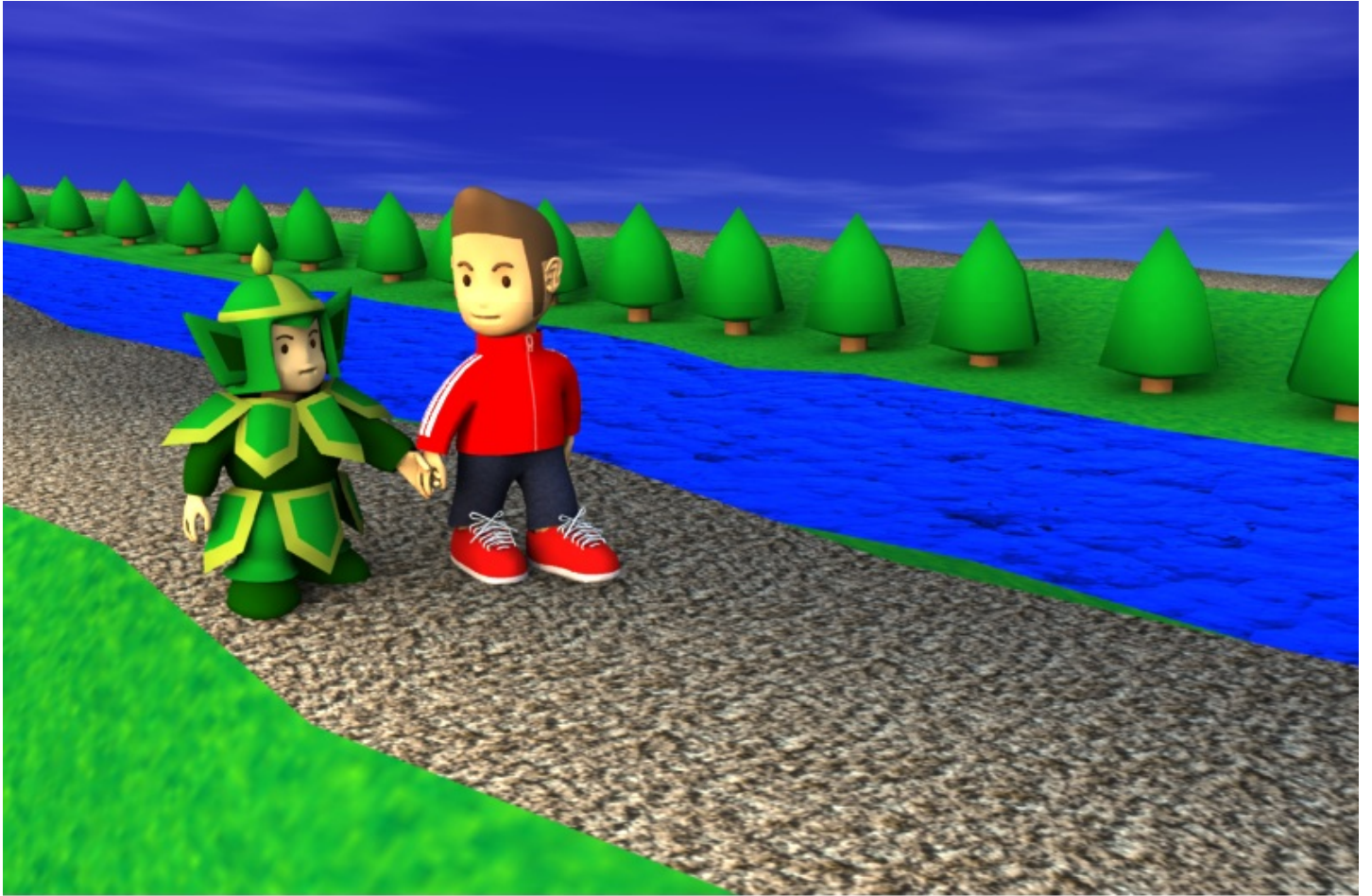
こうすけくんも なきながら、「ドジでも なんでも  
かまわない！きみにずっと うちにいてほしい！」と  
かけよりました。  
「ありがとう」そういうと ふたりは だきあいました。





いちぶしじゅうを みていた ぜんのうのかみさまは、  
「わかった。ドジがみ、これからも こうすけくんたちの  
いえを まもりなさい！」

と、ドジがみに いいつけました。  
「ありがとうございます！」こうすけくんと ドジがみは、  
いっしょに おれいを いいました。



きょうも こうすけくんは ドジばかりふんでいます。  
でも かまいません。

ドジな ともだちが みまもっていてくれるのだから。